



月謠
荻江一節

(荻江露友傳)

近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十八年十一月十日發行

全十四卷
定本 圓朝全集
（卷の六）

限定版 五五〇部 定価千貳百円 千三〇

校訂編纂者
圓朝會代表者
鈴木行三

發行者
松本富夫

版	定	限	
			第

發行所

株式會社

東京都目黒区原町一、三五五番地
世界文庫

電話 東京七二三局九二四四（代表）
振替 東京七七八四九八番

圓朝全集 卷の六 目次

口 繪

圓朝筆色紙
五代目尾上菊五郎より圓朝宛の書翰（河竹默阿彌代筆）
月謠萩江一節（大蘇芳年）

月謠萩江一節……………（挿畫 大蘇芳年）……………一
（狹江露友傳）

八景隅田川……………（挿畫 水野年方）……………二七

雨夜の引窓……………（序畫 夢覺）……………四九
（挿畫 後藤芳景）

心中時雨傘……………五〇一

月謠萩江一節

一

一席お聴に入れまするは、萩江露友の傳と申しまして、長唄から萩江節と云ふものが其の昔一派分れまして、つひ先頃まで四代目が存生で居りました。元祖が萩江露友、二代目が名人東治、三代目が喜三郎、それから吉原に家元の判がござりましたが、二代目露友が家元の判を、兩國米澤町に江島喜左衛門と申した人が居りましたが、是は元北川町様と申して大したものので、お大名へお金御用を勤め、お出入を致しまして、結構な暮しを致した人で、其家に萩江の焼印を預けて置きました縁で、四代目を相續致しましたと申しますに付いて、傳を調べてくれると頼まりましたが、ふと聴出しまして段々これを調べて見ますると、萩江露友と申す者は、元津輕様の藩中でございますして、只今本所に草薙庄五と云ふ馬の先生がございます。此の先生の家の過去帳に萩江露友と云ふ名が書いてございますから、先生に承りますと、全く私の家は萩江露友の家で、津輕藩で森庄五郎と云ふので、

森庄五郎が、姓であつたけれども、草莉の家へ養子に參つて、今では草莉庄五と名のりま
した、森の家は庄五郎となると必ず津輕侯のお屋敷を出ることがある、先祖か左様で、
庄の進や庄太郎や庄兵衛などと申す他の名前では津輕侯のお屋敷を出ることはないが、庄
五郎となると必ず其の者だけは森の家を出ることになると、妙なわけのものだらうと、草
莉先生のお話で發端を今日から始めますが、初めは些とお堅うございますが、追々お話も
お屋敷から外へ出ますとお和かになります。丁度發端は寛延二年己巳年の九月四日
の洪水でございまして、此時は本所邊は夥しい出水でござりました。横綱近邊は船でな
ければ參られませんやうなことで、此時は猿ヶ股が斷れる、葛西領の下平井の渡と砂村の
間の土手が斷れる、柳島龜井戸邊は一面の水になりましてと云ふことで、其の頃津輕侯は
津輕岩松信寧と仰せられて、未だお年若の殿様で、御隠居は出羽守と仰しやつて、柳島の
お下屋敷にお出でござりまする。洪水のことでございますから、皆お徒士の衆が船を漕ぎ
まして、奥様、老女、中老、お側の次のお女中達が皆出迎ひまして、船にお乗せ申して二
つ目のお上屋敷へお連れ申し、傳馬船などを出して之れへ荷物を積んで運びますやうなこ
とで、若士衆がお船を漕いで、今二人許り女中を助けて漕ぎ出さうとする時、砂村の渡

口下平井の口ニヶ所とも一度に斷れました。水位陰氣なものはございません。地震・雷・火事・親父と申しますが、火事は難澁なものでございませうが何だか陽氣で、デヤン／＼半鐘を打ちまして、アリヤリヤン龍吐て其所の所が烈しくなりますが、水は私も田舎に親類がございまして、葛西へ參つて居るうちに丁度出水に遭ひましたが、土手へお百姓衆が提灯を點けて、龜末な燵りかへつた弓張を點けまして、皆鋤鋤を持つて土手へ積みます材木を運びます。土手が斷れると早鐘をゴン／＼竹螺をブウ／＼、お百姓衆が斷れたよう／＼と、何んだか引入れられるやうな心持ちが致して誠に陰氣なもので、ドツと土手が斷れると、忽ちに満水になりました。水は渦を卷いて押流れます。家はグラグラと忽ちに搖ぎ出して流れます。大樹は根こぎになつて流れます。井戸も雪隠も一つになりまして流れ、實に地獄の責めて。さうすると角の河野六郎と申す二百石頂戴致します人が在りますが、此の六郎がお國詰で、御新造にお嬢様がお在で、今グラ／＼と搖れたかと思ふうち此の家は轉覆りました。素より彼の邊は濕地の事でございませうから忽ち家が流れますと、キイ／＼と娘と御新造の泣き叫ぶ聲が致しましたが、それも沈んだと見えまして遂には聲も聞えなくなりましたが、何處かへ擱つて浮上つて、玄助けて下さいよう

といふ聲が、又水の中へずーッと沈むと、聲が無くなりましたのを、若士衆が是を見て、若彼の長家は誰が住居か。主河野六郎殿の住居で、六郎殿は國語で。若何うかして助けられんか、まア誰か飛込んで。誰も飛込むものがない、飛込めば大樹が流れて来るから肋腹へでも當れば共に死ななければならん、何うぞと思ふ親切はあつても逆まく水の中へ飛込み助ける者はございません。所へ乗合した者は、森庄五郎と申して年は二十三歳で、色の白い口元の締つた、鼻筋の通つた眉の濃い好い男で、水練が達して居るから、ものをも言はず上へ着たものを脱ぐが早い、逆まく水の中へ飛び込み、拔手を切つてずん／＼と泳ぐ、肩の所が出ましてナ、上手な人の泳ぎは違つたもので、只今では大分水練場が出まして、それ／＼教師が出て教へますのに、水の中では軽いものと見えまして、人間を掌へ乗せまして泳がして、龜の子のやうに手足をポチャ／＼遣つて、少しは水を呑まなければ上手になれんなどと申します。乳邊りまで出なければ上手でないと云ひます。ずん／＼んと水に逆らつて泳ぐと、他の士衆が、主森氏が飛込んだが、若し怪我をするといかん、人を助けようとして怪我をしてはいかん／＼。と云ふも、森は見もかへらずスツ／＼と泳いで、四十歳になる御新造と、十三になるおかのと云ふお嬢さんを兩方に抱込んで、立

泳ぎで、早く助けようと思ふが、二人を抱いて居るから何うも思ふやうに體が利きません。ドツ／＼と流されます。早く船に泳ぎつけようとしてもなか／＼間に合ひません、其の中身體も疲れるから追々體も沈んで来る、何分二人を抱いて居るから當然で、時々水をブウ／＼と吹いて、庄助船エー船を持つて来い／＼やア。といふ其の聲の美しいこと、後には萩江節の家元になる位だから美聲で大聲で、其の聲が水音に逆つて何うも遠くまで響きますると、好い鹽梅に此所を小松川の方から肥船の上へお婆さんに子供に道具などを乗せて、お百姓が二人許りで漕いで来る所へ流れて、助け船えーといふ聲に、百姓「ソレ助けろ。と親切なお百姓で、手を持つて三人を漸く引上げて、先づ無事で親子の者を森庄五郎が助けました。是からお上屋敷へ連れて参るやうになり、其のうち出水だから十日も経ちますと穩かになり、命の親だから森さんの所へお禮に往かなければ濟まないといつてをりてしたが、娘が氣落をして薬を服み、體が悪いので大に口も遅れましたが、結構な鰐節の折に白羽二重の反物を包んで、母おすみは下男をつれて娘と共々森の家へ参り、女關から案内を乞ひ、女房へいお頼み申しす。庄傳助は居りませんか。母「傳助は居りません。庄「ぢや私が出迎へませう。とつか／＼と森庄五郎が女關の三疊の所へ出まして、庄「これは宜う

こそ。女「誠に御無沙汰を致しまして、早速お禮に上りませんければなりません所を、少々娘が氣落を致しまして、不快で、存じながらお禮が延引になりまして。庄「まア御無事で喜ばしうございます、祖母もお案に申上げて居ります、まア此方へお通り遊ばせ。女「御免遊ばしませ。庄「誠に見苦しうございまして此の通り掃除が屆きませんで。女「何う致しまして何とも此度のことはお禮の申上げやうもございません、早速國表へ手紙を出した所が、彼地からも喜びまして、能くお目に掛つてお禮を申上げるやうに、何分主用が多端でこまかい書面は出せないから、貴方様へ宜しなに御傳言致すやうにと、六郎から書面も参りました、それも御覽に入れたし、實に此度は、私も其の後は大方悪い水でも呑みましたのだからとお醫者も申しますが、快うございませんで御無沙汰を致しました、何とも申さうやうもございません。庄「何ういたしまして誠に宜い、まア御運の強いので、實に此度の洪水は思ひがけないことで、祖母に聞きますと、斯う云ふ洪水は覺えがないと申します……お祖母さん。母「はい。と出ましたのは隠居お種と申し、庄五郎は兩親が早く亡りまして此の老母に育てられ、六十九になります人で、其處へ出て参りまして、其時女房は老母に向ひまして、女「御老母様御機嫌宜しう。母「誠に御無沙汰を致しました、此度は怪し

からん洪水でございまして、もうねあなた様、私も此の年まで覚えません事で、いゝえもう何う致しまして、能くお助け申したと庄五郎にも申聞けました、まア御運強い事で、殊にお留守中ではあり、嘸お國表でもお案じなすつたらう、まア何方でも一つお屋敷中にお怪我の無いのは此の上もない幸ひのことでございまして、何う致しまして、はいお互さまの事でねあなた様、泳はね庄五郎は幼年の折から上手でございましてね、はア……それゆゑ水練の家柄で、血脉を引いて居るから習はずして上手だと、森川さんなどが仰しやるので。女「有難い事でございまして。母「何う致しまして、なぜ左様な御心配をなさいます。女「いえこれは到來合せてございまして、些細な物でございしますが、何うぞほんの志ばかりで、御笑納下されば有難う存じます。母「いえ戴きません此の事に就いてはお禮を戴く道理はございませぬ、一つお屋敷に居りましてはお互の事で、左様な事はありませぬ、戦争でも有りまして怪我があれば共に陣中にあつて手當を致するは當然のこと。女「何うぞ左様な事を仰しやらずに。母「いえ戴きません、此のまア結構なお反物を頂戴致しましては却て庄五郎の親切が無になり、上へ聞えても宜くない……あや／＼おかの様大層お身大くお成り遊ばし、誠に評判の宜いお娘で、御孝心で、毎度お噂を申して居ります、近

頃は快うございますか、嘸まア驚きでございましたらう、誠によいお娘様で、只今生憎なにか……しげやあのお茶を。女「何うぞお構ひ下さらずに、左様仰しやつては困ります、折角の何て何うか。母「いえそれは戴きません、お助け申した事は不思議なことで、是が因縁とても申しませうか、人は助けて置きたいものでございまして、私どもの庄五郎が、貴方様をお助け申したのは不思議な事で、私どもの先祖の森庄五郎が、洪水のときね貴方がたの先祖の河野六郎様に助けて頂きましたことが有ります。女「へえそれは何う云ふ……。母「私も存じませんが、丁度此年から百二三十年前、寛永四年八月洪水のとき、素と猿樂町にお屋敷がございました頃、貴方権現堂が斷れまして、九段の下迄水が参りましたと、其時の洪水は一通りならん洪水で、人家を押流しましたことは夥しいことで、其の時に先代の森庄五郎が、片方の手に大小と系圖書を持ち、片方の手に年老つた母を抱へまして、泳が達者でございましたから泳ぎましたところが、だん／＼身體が疲れてもう仕方がないから大小と系圖書を捨て母を助けたいと思ふと、系圖書を捨てますれば家が絶えますなれども、系圖書をいとひますれば、たつた一人の母を見殺しにしなければならぬ、何うも致し方がないと思ひ、系圖書と大小を捨て、母を抱いて漸く九段の上へ泳着き

まして、それであなた母は助かりましたが、お屋敷を暇になりました、不束の至りと申し
てな、暫く浪人して居りました時、貴方様の御先代の河野六郎様が、それは孝心者、人命
には代へられない、母を助けたい爲に系圖と大小を捨てましたは孝心でございます、お役
に立つべき武士だからお取立を願ふと云ふので、召し返しになつて、新知百石を頂戴致し
ました、もとは三百石でござりました、只今百石取りの身上で居られますのは、貴方様の
御先代河野六郎様のお蔭様それが百二三十年の後に又水で貴方様をお助け申すと云ふのは
是れは誠に不思議と、庄五郎にも申聞けます、これがもとの御恩を報す應報とやらでござ
います。六郎の女房も始めて聞きまして、女へえ、始めて承りましたが、それはあ
なた様、命をお助け申したのではない殿様へお執成を致してお召返しを願ひましたので、
現在其の場で已に流される所をお助け下さつた御恩、是は實に何とも申し上げ様はございま
せん、それとは是れとは違ひます。母「いえ何んな事があつてもそれは戴きませんが、それ程
あなたが思召すなら私がひとつ願ひがございますが、おかの様は何方かへ御縁組がご
ざいますか。女「はい未だ年も参りませんし、何方へも相談は致しません。母「そんなら願ひ
たいもので、何うせ他家へ御縁付きになる嬢さまなら、庄五郎は誠に幼年の時分から両親

に分かれて、親なし子で、婆アの丹誠で是までに致しました、何うか良い嫁を娶りたいと存じますが、おかのさまが来て下されば私も安心いたします、早く極めませんと私も來年は七十になり、心配でございますから何うかあなたね、少祿者で御意には入りますまいが、おかの様を庄五郎の嫁に下さる譯には参りますまいか。女誠にそれは有難いこととでございます、私に於いても決してあなた様異議はない事ではございますが、縁づくの事でございますから、常人の胸も聞きませんでは、今がいま御挨拶も出来ません。母何うか其のところはおかの様にお聞遊して……ねえおかの様、私共の庄五郎は二十三歳で、そんなに醜い男でもない、慾目かは知れんが、世間様で好い男くと云ひますし、劍術は可成り出来ます、水練は餘程上手でございます、殊にあなたね柳島の御隠居様は遊藝がお好きでいらしつて私共の良人なども時々お相手で三味線位は弾きますし、横綱に坂田仙四郎と申す長唄の名人がございまして、それに稽古を致しますのを自分で聴いて覺えて真似を致しますが、習ひませずとも節もうまし、聲も宜うございます、婆アがポツ／＼三味線で、時々小聲で遣りますすが美聲でございますはア……左様なことは何うても宜いが何うかおかの様宜しいぢやア有りませんか、貴方さへ宜いと仰やれば直ぐに極ります。女誠に

彼の通り顔を赤くして居ります、六郎が國詰で居りますから歸宅の上一應六郎に申し聞け
否と申す氣遣は有りません、其の上確な取極めを致します。母「左様なすつて下されば私死
んでも浮み上ります。女「最う遠からず歸りませう、まア今日は是で暇いたします。母「そ
れては是は歸りまで、結納代りとして頂戴致します。女「左様先へお極め遊ばしては。
母「いえ私の方では結納の積りて。と老母は喜び、御新造も娘と共に命を助けられた
庄五郎の家へ嫁に遣つても宜いと喜んで宅へ歸りました。是から折々庄五郎の宅へ娘も來
る、庄五郎もおかの手を引いて龜井戸あたりへ連立つて歩きます。此方も許嫁の良人
と思つて、子心にも思ひは變らぬもので。これから三年めの六月中旬に六郎は江戸お屋敷へ
歸りました、歸り早々御用繁多でございまして、其中へこれ／＼と老母が強つての頼み
とも言ひ兼ねて居つたが、然のみ悪くもない縁と心得ましたから、六郎歸宅の上申し聞け
ようと私が云ひのべて置きました、何う致しませうと云ふと、それは至極良い縁だ早々
取極めるがよいとの挨拶があつたから、御新造は喜びまして、老母へ返答を致しましたか
ら、老母も喜びまして、早く結納の取交せをしたいと申して居ります。

二

其の翌年は寶曆二年でござりましたが、丁度三月十八日晚方に、六郎が御殿から歸りまして、六はい只今歸りました。女大層お遅うございますから心配を致しました。六お番引に一寸笠原殿の所へ呼ばれましたが、幸ひのことで、斯う云ふわけで、笠原殿の親類が奥様の里方の大和公の重臣で、福永忠太夫といふ者だが、其の長男の忠之丞と云ふ今年二十六歳だと申すが中々逞しい武士、何事も年に似合はず秀てであるが、彼の者が此の春とか、かのが羽根をついて居るとき、笠原殿へ年頭に來て見て、良い娘だ貰ひたいと伯父の笠原殿へ左様云つたさうだ、それで貰つて遣らうと受合つたとかいふので、重臣の笠原が手を下げてな娘を遣つて呉れんかとのこと、良縁であるしすれば、國に居る左七郎の爲にも宜しいから左七郎に於いても否やはあるまいし、確とお受けを仕たら向うでも急ぐ様子早く結納の取交せをせんでばならぬ、相當の扮装もさせなければならぬが、此の上もない實に何うも忝ないことで、かのを呼んで篤と申聞けた方が宜からう。女それは貴方いけません。六なぜ。女なぜだつて貴方森庄五郎殿方へお遣り遊ばす約束になつて居ります。

六「なんて森庄五郎に。女「何を御意遊ばす、お國からお歸り遊ばした時に、洪水のとき助けられた恩義があるし、向うでも懇望致しますから娘を遣りませうか如何致しますせうと伺ひましたら、貴方は至極宜い縁談だから取極めるが宜いと仰しやつて、森庄十郎方へ直ぐ其の足でまゐつて約束しましたものを、今になつて他へ縁付けましては森へ濟みません。六「森の方を斷つて仕舞へ、何も私が極めたわけではなし、女同志の口約束、結納を取換したわけでもなし、福永方へ遣るが宜い、少祿の森へ縁付けることはなし、確とお斷んなさい。女「そんなお無理を仰しやつても斷りやうはございません、六郎確と承諾致しましたと老母へ申し聞け、同人も喜びまして、私も安堵して死なれますと申し居るに、今になつて六郎が不服でござるとは申せません。六「申されんことはない結納を取交はせた譯ではなしね。女「ではございますが命を助けられました恩人ではございませんか。六「命を助けたと云つても言はゞ先方が勝手に飛び込んで助けたので、殊には先代が森の家を助けた事もある、恩報を向うでしたのだ、それで義理は差引と申すものだ。女「そんな事を御意遊ばしても私は參られません。六「參られぬ事はありません、實は其の時六郎が歸宅の節一寸申した所、六郎も歸り早々取込んで居つて申誤つたと云へば宜い、少祿者の所へは遣りませ